
長所の自己開示が他者軽視傾向の低減に与える影響⁽¹⁾

三島 爽 暉 (立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻)
高橋 尚 也 (立正大学心理学部)

Effect of Self-disclosure about strength on Assumed Competence reduction

Sawaki MISHIMA (*Rissho University, Department of Psychology, Master Course of Interpersonal and Social Psychology*)
Naoya TAKAHASHI (*Rissho University*)

Abstract

In this study, we analyzed the effect of experiencing mutual understanding situation in which participants reflect on their strengths included in their own positive aspects and recognize each other's strengths on reducing tendency undervaluing others that is the core of assumed-competence. Forty-six undergraduates and graduate students participated in a group experiment consisting of three or four people. In this experiment, participants were instructed to describe their strengths based on past successful experiences and future prospects that made use of the strengths, and were required to disclose with others. As a result, the participants who had high self-esteem and tendency undervaluing others before the experiment had a significantly higher reducing effect on the tendency undervaluing others than the participants who had low self-esteem and high tendency undervaluing others before the experiment. Participants who had high tendency undervaluing others before the experiment and a negative mood arose during the experiment did not show a significant reduction effect on tendency undervaluing others by the operation of this study.

Key words : assumed-competence, tendency to undervalue others, self-esteem, strengths

仮想的有能感は「自己の直接的なポジティブ経験に基づくことなく、他者の能力を批判的に評価・軽視する認知的傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」(速水・木野・高木, 2004)と定義される。この構成概念を測定するための尺度として Assumed Competence Scale (以下, ACS とする) が作成された。また現在では、調査対象者に合わせた表現に改良された ACS-2 (Hayamizu, Kino, Takagi & Tan, 2004) が広く用いられている。この ACS-2 は 5 段階評定尺度で、「自分の周りには気のきかない人が多い」、「他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうかと感じる」などの 11 項目から構成されている。この尺度は無意識的に生じやすく直接測定しにくい仮想的有能感が他者軽視傾向の強さに対応すると仮定されている。このことから ACS-2 で測定されている内容は他者軽視傾向の強さであるといえる。そこで本研究では ACS-2 で測定している内容を「他者軽視傾向」と捉え検討を進めることとする。

仮想的有能感の特徴

仮想的有能感に関する研究は、その特性から自尊感情との関係について対比的に検討されている。自尊感情は

「自己に対する肯定的または否定的な態度」(Rosenberg, 1965)と定義され、自己を受け入れるような認識に近い感覚であると考えられており、過去の成功体験に基づき形成されるという点で仮想的有能感とは概念的に独立であるとされている(速水・木野・高木・蘭・佐藤・小泉・櫻井, 2003)。このことから仮想的有能感に関わる研究ではしばしば自尊感情との組み合わせで有能感を 4 タイプ(全能型・仮想型・自尊型・委縮型)に分類した上で研究が行われている(速水, 2011)。このうち、仮想的有能感が高く自尊感情が低い「仮想型」は、他者を軽視することによって低い自尊感情を補償的に高めていると考えられ(速水・小平, 2006)、仮想的有能感の定義上で最も適合する有能感タイプであるとされる。また、この有能感タイプのうち、仮想的有能感が高く自尊感情が低い「仮想型」、および仮想的有能感と自尊感情のどちらも高い「全能型」は、これまでの研究によって仮想的有能感の高さに由来する様々な社会的不適応を起こすことが明らかになっている。

小平・小塩・速水(2007)は大学生を対象に対人関係における感情経験について有能感 4 タイプそれぞれとの比較を行っており、「仮想型」は自尊感情が高い「自尊

型」および「全能型」と比べ、日常生活で経験する出来事をより悪いと認知しやすく、抑鬱感情をより強く経験することを報告している。また、「自尊型」と比べ敵意感情を抱きやすくその変動性も高いことが明らかにされた。時間的展望との関連（速水・杉本，2012）では、「仮想型」は現在・過去・未来のすべてについて、「全能型」は過去についての肯定的展望を有しにくいことが報告されている。時間的展望に関する研究では、過去・現在・未来についてネガティブに捉えている「展望低群」は精神的健康度が低いことが知られている（日潟・齋藤，2007）。速水・杉本（2012）の研究では大学生を対象に仮想的有能感と就職に対するイメージが調査され、「仮想型」は就職というライフイベントに対し、拘束的で希望はそれほどもてていないというネガティブなイメージを有することが明らかになっている。また、松本・山本・速水（2009）は高校生を対象に有能感4タイプといじめ加害・被害との関連について調査を行い、仮想的有能感の高い「仮想型」および「全能型」は、いじめの加害経験・被害経験がともに多いことを報告している。これはどちらの有能感タイプも他者を見下すという周囲から受け入れられにくい心性によっていじめに関係すると考えられている。

以上のことから、仮想的有能感の高い個人は日常生活での出来事だけでなく過去や未来をネガティブに捉えやすく、常に精神的健康を損ないやすい状態にあると考えられる。さらに、蓄積したネガティブ感情を対人関係上では他者を軽視するという不適応な言動で表出し、特に青年期では好ましい人間関係の構築を妨げる要因になりうると考えられる。

仮想的有能感の低減

これまで、仮想的有能感の高さがもたらす社会的不適応を改善することを目的に、仮想的有能感の低減に注目した研究が行われている。

仮想的有能感が相対的な自己評価に基づく有能感であるという観点から、キャリア教育科目の受講（植村，2010）や社会福祉士の実習経験（高木，2010）での自己評価の変化をきっかけに仮想的有能感が低減されると考え、縦断的な検討を行っている。しかし、この2つの研究において受講や実習の前後で仮想的有能感の変化は見られなかった。これは「講義の受け止め方や実習における経験の質に差があり、その影響にも個人差があるため（速水，2012）」と考えられている。

速水（2012）によると、仮想的有能感の低減に関わる要因として親密な対人関係を促進することが挙げられると指摘している。高校生を対象に行われた研究では、教師が生徒の成長を促進するための援助を熱心に行った場合は仮想的有能感の低減が見られたが、教師が生徒に対

して積極的な関与を行わなかった場合は仮想的有能感の増加が見られている（山本ら，2008）。このことから学校教育においては、教師と生徒の十分な相互理解が仮想的有能感の低減に関係すると示唆されている。また、大学生を対象にした研究ではブレインストーミングやグループ発表といったグループでの協同的活動が仮想的有能感を低減させるかが検討され（鈴木，2010）、協同的活動以前に仮想的有能感が高く活動後に低減した群は、協同作業効用に関する認知の促進によって仮想的有能感が低減されたと考えられている。

石川・茅野（2018）は、堀川・柴山（2015）が作成した心理教育プログラムを用いて基本的自尊感情⁽²⁾の向上による仮想的有能感の低減を検討している。このプログラムは学校集団での児童を対象に認知・身体面へアプローチすることでの自尊感情の向上および不安の低減を目的として構成されていた。石川・茅野（2018）は全6回から構成されるプログラムのうち否定的認知の自己受容と集団による改善、および身体のリラックスによる不安の解消を主とした第3回―第5回を実施し、プログラムの実施前後で基本的自尊感情および仮想的有能感の変化を検討している。プログラム実施直後は実施前と実施1カ月後に比べ基本的自尊感情の向上が確認されたが、プログラム実施前後で仮想的有能感の有意な低減は確認されていない。よって、個人の否定的認知への働きかけは基本的自尊感情の向上に効果がみられるものの、仮想的有能感の高い個人が有する対人関係上のネガティブな認知は払拭されにくく、他者を肯定的に認知するまでには至らないと推察される。

以上より、これまでの研究では仮想的有能感の低減に関して一貫した有意な効果は確認されていないことが指摘できる。しかし、一部ではあるものの低減が確認された山本ら（2008）や鈴木（2010）の研究に共通する点は、仮想的有能感の高い個人に対して理解しようとする他者からの働きかけがあったこと、また、仮想的有能感の高い個人が他者を理解しようとする認知が促進されたことである。つまり、仮想的有能感の高い個人とまわりの他者が相互に理解をしようとする関係を構築することが仮想的有能感の低減に寄与すると考えられる。また、石川・茅野（2018）が実施したプログラムは速水（2012）の指摘する親密な対人関係が促進されていたと考えられるが、個人の否定的認知の改善・不安の解消がねらいであったため仮想的有能感の有意な低減がみられなかったと考えられる。この結果から否定的認知の改善へ向けた働きかけでは仮想的有能感の高い個人が有する過去の対人関係に基づくネガティブな認知が払拭されにくく、他者との相互理解状況を構築しにくいことが推察される。相互理解のための手段として否定的認知の改善ではない方策を検討する必要がある。

肯定的側面への注目

ポジティブ心理学では個人の肯定的な側面である強み(Strengths)に注目した研究が行われている。強みとは「人が活躍したり最善を尽くすことを可能にさせる特性」と定義される(Wood, Linley, Maltby, Kashdan & Hurling, 2011)。その中でも道徳的に価値ある強みとされる性格特性的強み(Character Strengths: 以下, CSとする)は「思考、感情、行動に反映されるポジティブな特性」と定義され、Values in Action Inventory of Character Strengths (以下, VIA-IS とする; Peterson & Seligman, 2004)を用いて測定されている。24種類のCS (Peterson & Seligman, 2004)のうちいずれかのCSは主観的well-beingとは正の関連、不安や抑うつとは負の関連を示すことが明らかとなっている(大竹・島井・池見・宇津木, 2005; Park & Peterson, 2008)。このことからCSに基づく介入による精神的健康の改善を目指した研究が盛んに行われている。CSに基づく介入研究は、参加者が回答したVIA-ISで得点が上位であった特徴的な強み(Signature Strengths: SS, Seligman, 2012)に介入することで、幸福感の増加や抑うつ症状の減少がみられるなどの知見が得られている(Seligman, Steen, Park & Peterson, 2005; Mitchel, Stanimirovic, Klein & Vella-Brodrick, 2009)。また、近年では学校教育上で強みに介入するプログラムが開発・実施されている。

Quinlan, Swain, Cameron & Vella-Brodrick (2015)は、強みの介入による個人の精神的健康の改善だけでなく集団の関係性に対する効果に着目し、自己の強みを自覚しプログラム内で友人関係の中で強みを活用することやクラスで互いに強みを認識しあう経験を行うことでクラス集団の構成員同士の衝突が低減したことを明らかにした。以上より、強みの介入によって仮想的有能感の高い個人が抱える精神的健康の問題の改善に効果があると考えられる。また、集団内で構成員が互いの肯定的側面である強みを認識しあうことで相互理解が促進されたと考えられ、集団状況下での強みへの介入による仮想的有能感の低減が期待される。

目的

本研究の目的は、仮想的有能感の中核をなす他者軽視傾向の高い個人が、強みという個人の肯定的側面を認識しその内容を周囲の他者に開示しあうという相互理解状況を経験することで、他者軽視傾向の低減に寄与するかどうかを探索的に検討することである。

これまでの仮想的有能感に関する研究で類型化された他者軽視傾向と自尊感情との組み合わせによる4タイプで、特に他者軽視傾向の高い「仮想型」および「全能型」では、強みの認識(肯定的認知への焦点化)に違いがみられると考えられる。時間的展望との関連(速水・杉本,

2012)で明らかになったように、他者軽視傾向は過去に対するネガティブな認知に影響するためどちらの有能感タイプも焦点付けが難しいと考えられるものの、「全能型」は自尊感情の高さによって肯定的認知への焦点付けが比較的容易であると推察される。また、強みの認識と同時に、強みの活用として未来展望についても記述を促すことで「全能型」はより抵抗なく記述できると考えられる。以上より、強みの認識および活用について既存の尺度を用いず参加者自らが強みを主体的に考え開示することで、他者軽視傾向が高く自尊感情も高い「全能型」は他者軽視傾向が高く自尊感情が低い「仮想型」に比べ強みの焦点化および自己開示が達成できるため他者軽視傾向が低減されると考えられる。

仮説

本研究では以下の3つの仮説を設定した。他者軽視傾向と自尊感情が高い参加者は、他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者に比べ、自尊感情の喚起によって自己の肯定的側面である強みへの焦点づけが容易であり、ほかの参加者との強みの相互開示状況という親密な対人関係を媒介に他者軽視傾向が低減される(仮説1)。また、仮説1が支持された場合、他者軽視傾向が自尊感情として補償的に働くことから、他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者は、他者軽視傾向が低く自尊感情が低い参加者と比べて自尊感情が向上されにくい(仮説2)。さらに他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者は、過去や現在の出来事をネガティブに認知しやすいという特徴から、過去の経験に基づく自己の長所を内省することや自己開示という対人経験がネガティブに認知されやすく、このネガティブな認知を要因として他者軽視傾向の低減が阻害される(仮説3)。

方法

本研究では3つの仮説を検証するため、個人が自己の肯定的側面に焦点化するために過去の成功体験に基づく自己の長所およびその長所を生かして今後挑戦したいことを記述するよう参加者に教示する。そしてこれまでの仮想的有能感低減に関する研究で有効とされてきた親密な対人関係の促進に関する知見を踏まえ、参加者が互いに記述内容を自己開示する集団実験を行った。

実験参加者

実験は2018年10月に、大学構内の実験室で行われた。実験参加者の募集は大学内で行われ、集団実験が実施される旨が説明された。その後協力意向が示された者に第1質問紙を配布し回答を求めた。第1質問紙は他者軽視傾向尺度(Hayamizu et al. (2004)の11項目)と自尊感情尺度(山本・松井・山成(1982)の10項目)から構成

されていた。実験参加者は、大学生・大学院生46名（男性11名、女性35名）であった。年齢の回答は求めている。全実験参加者46名のうち質問紙の回答項目に無記入のある計5名の参加者は分析の対象から除外した。

実験手続き

説明と同意 参加者は実験者によって3～4人のグループに分けられた。この際一つのグループに男性と女性が混在しないよう統制された。実験日に参加者は実験室に集合し、所定の椅子に着席した。はじめに実験参加の謝礼として300円程度の菓子が提示された。そして実験者によって実験方法、個人情報取り扱い、実験の参加及び中断の自由に関する説明を受けた。この際にビデオカメラによる撮影の許諾がとられた。説明に同意した参加者は指定の実験参加同意書に署名をした。

ワークシートへの記入 参加者がワークシートの質問に対し、約10分程度個別に自由記述を求めた。記述が終わっていない参加者がいた場合は参加者全員が記述し終わるまで時間を延長した。またこの際に記述ができない場合は無理に書く必要のない旨を教示した。ワークシートの内容は、はじめに「あなたが自分自身について良いと思うところはなんですか？具体的なエピソード付きで考えてみてください。どんなに些細なことでも構いませんので自由に書いてみてください」とたずね、よいところと具体的なエピソードのそれぞれについて記述する欄を設けた。次に「その良いところを生かして将来やってみたいことは何ですか？」とたずね、自由記述欄を設けた。

自己開示とフィードバック 続いて参加者の一人がワークシートの記述内容をグループに自己開示し、ほかの参加者は開示内容に対して質問や感想といったコメント付けをした。どちらも約3分を目安に行われたが、会話が不自然に切り上げられないよう実験者によって適宜調整された。順番にすべての参加者が自己開示とコメント付けを繰り返した。コメント付けは各参加者が開示者の開示内容を聞いて浮かんだ率直な感想や質問を簡単に一言程度で開示者に話すよう教示された。

第2質問紙への回答 第2質問紙は、実験中および実験後に生じた気分に関する質問、他者軽視傾向尺度（速水（2006）の11項目）、自尊感情尺度（山本・松井・山成（1982）の10項目）から構成されていた。実験中および実験後に生じた気分に関する29項目は独自に作成された。教示文：「実験中、または実験終了後、あなたは以下の項目にどの程度あてはまりましたか」と教示し、5段階で評定を求めた。第2質問紙への回答が終了した参加者から順に解散した。参加者がワークシートを記述してから第2質問紙に回答し終わるまでおよそ30分程度であった。

実験デザイン

本実験は実験前他者軽視傾向得点および実験前自尊感情得点を独立変数、他者軽視傾向得点変化量、自尊感情得点変化量を従属変数とする2要因混合計画であった。

結果

指標の作成

自尊感情尺度（第1質問紙 $\alpha = .79$ 、第2質問紙 $\alpha = .84$ ）と他者軽視傾向（第1質問紙 $\alpha = .84$ 、第2質問紙 $\alpha = .87$ ）は元論文に従い単純加算して尺度化した。

実験前自尊感情と実験後自尊感情および実験前他者軽視傾向と実験後他者軽視傾向の平均値の差を検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、実験後自尊感情は実験前自尊感情に比べ有意に高く（ $t(40) = -3.185$, $p < .01$ ）、実験後他者軽視傾向は実験前他者軽視傾向に比べ有意に低かった（ $t(40) = 3.200$, $p < .01$ ）。

実験中、または実験終了後の気分について

実験中または実験後に生じた気分について独自に作成した29項目について、「非常によく当てはまる」を5点、「全く当てはまらない」を1点と得点化し、平均値を算出した。平均値の高かった項目は、「新鮮だった」「気恥ずかしかった」「ためになった」「興味深かった」「自分を見つめなおすきっかけになった」などであった。これらの項目に対し、因子分析（主成分分解、プロマックス回転）を行ったところ、すべての因子に対して負荷量が低い、または複数の項目において因子負荷量が高い項目が5項目あった。これら5項目を除外し、解釈可能性から4因子解を採用した。4因子の累積寄与率は63.2%であった。回転前の固有値は、順に8.508, 3.439, 1.787, 1.429であった（Table 1）。

第1因子に負荷量の高い項目は、「自分を見つめ直すきっかけになった」「ためになった」「新鮮だった」「こういうことをもっとやってみたいと思った」「前向きになった」「興味深かった」であった。したがって、この因子は実験自体に対する肯定的印象や実験を通じて自己に対しての肯定的展望を表す因子と解釈された。そこでこの因子は「実験肯定・自己肯定的展望」因子と命名された。

第2因子に負荷量の高い項目は、「どうしていいかわからなくなった」「不安になった」「落ち着かない気分になった」「無力感がした」「逃げ出したくなった」「気分が萎えた」「気分が晴れた（逆転項目）」であった。したがって、この因子は実験操作によって生じた現在不安感情を表す因子と解釈された。そこでこの因子は「現在不安」因子と命名された。

第3因子に負荷量の高い項目は、「イライラした」「一人になりたくなった」「むしゃくしゃした」「憂鬱になった」「物にあたりたくなった」「つらくなった」であった。

Table 1. 実験中に生じた気分の因子分析：回転後の因子負荷量（主成分分解・プロマックス回転）

項目番号	項目内容	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
Q3-23	自分を見つめ直すきっかけになった	.847	.180	-.003	-.048
Q3-24	ためになった	.794	.206	-.228	.111
Q3-9	新鮮だった	.793	-.008	-.124	-.032
Q3-25	こういうことをもっとやってみたいと思った	.752	-.343	.106	-.114
Q3-26	前向きになった	.677	-.252	-.109	.121
Q3-28	興味深かった	.599	-.286	.321	-.003
Q3-6	どうしていいかわからなくなった	.057	1.024	-.268	.129
Q3-7	不安になった	.080	.788	.248	.164
Q3-14	落ち着かない気分になった	-.173	.764	.061	.149
Q3-20	無力感がした	-.275	.613	.059	.138
Q3-12	逃げ出したくなった	.046	.538	.244	-.265
Q3-13	気分が萎えた	-.046	.513	.310	-.114
Q3-5	気分が晴れた	.421	-.438	.131	.297
Q3-3	イライラした	.008	-.129	.811	.366
Q3-8	一人になりたくなった	.059	.156	.723	-.120
Q3-19	むしゃくしゃした	.012	.198	.671	.129
Q3-11	憂鬱になった	.202	.248	.604	-.293
Q3-4	物にあたりたくなった	-.235	-.174	.575	.041
Q3-29	つらくなった	.051	.401	.504	-.151
Q3-17	認められたような気がした	.144	.334	-.119	.868
Q3-18	楽しかった	.251	.231	.081	.798
Q3-22	気恥ずかしかった	.432	.237	-.284	-.740
Q3-1	自信がついた	.296	-.063	.006	.571
Q3-10	好奇心がそそられた	.355	.023	.136	.449
			-.306	-.116	.430
因子間相関				.412	-.565
					-.372
α 係数		.88	.88	.82	.76

したがって、この因子は実験操作に対する強い拒絶を表す因子と解釈された。そこでこの因子は「実験反発」因子と命名された。

第4因子に負荷量の高い項目は、「認められたような気がした」「楽しかった」「気恥ずかしかった（逆転項目）」「自信がついた」「好奇心がそそられた」であった。したがって、この因子は現在自己に対する肯定的感情を表す因子と解釈された。そこでこの因子は「現在自己肯定」因子と命名された。

このように実験中または実験終了後に生じる気分に関する項目は、対人経験でのポジティブな認知を示す「実験肯定・自己肯定的展望」「現在自己肯定」、および対人経験でのネガティブな認知を示す「現在不安」「実験反発」から構成されていることが明らかとなった。

実験前の他者軽視傾向および自尊感情が他者軽視傾向得点変化量に与える影響

実験前自尊感情得点と実験前他者軽視傾向得点が他者軽視傾向得点変化量および自尊感情得点変化量に与える影響を検討するため、実験前自尊感情得点、実験前他者軽視傾向得点、実験前自尊感情得点と実験前他者軽視傾向得点の交互作用項の3変数を独立変数、他者軽視傾向得点変化量、自尊感情得点変化量を従属変数として、強制投入法による階層的重回帰分析を行った（Table 2）。

検定の結果、従属変数を他者軽視得点変化量とした場合、主効果のみのモデル（step 1）と比較して、交互作用項を含めたモデル（step 2）は、交互作用項の投入による調整済み決定係数の増加が有意であった。また、交互作用項は他者軽視傾向得点変化量を有意に予測していた。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った（Figure 1）。その結果、実験前他者軽視傾向得点が低い場合（ $-1SD$ ）、実験前自尊感情得点は他者軽視傾向

Table 2. 他者軽視傾向と自尊感情の交互作用に関する階層的重回帰分析の結果

従属変数	Step	独立変数	R^2	ΔR^2	β
他者軽視傾向 得点変化量	1	主効果	.073		
		実験前他者軽視傾向 (a)			-.023
	実験前自尊感情 (b)	.277			
	2	交互作用	.169	.097*	
		(a) × (b)			.360*
自尊感情 得点変化量	1	主効果	.011		
		実験前他者軽視傾向 (a)			.062
	実験前自尊感情 (b)	.063			
	2	交互作用	.152	.141*	
		(a) × (b)			-.435*

注) * $p < .05$

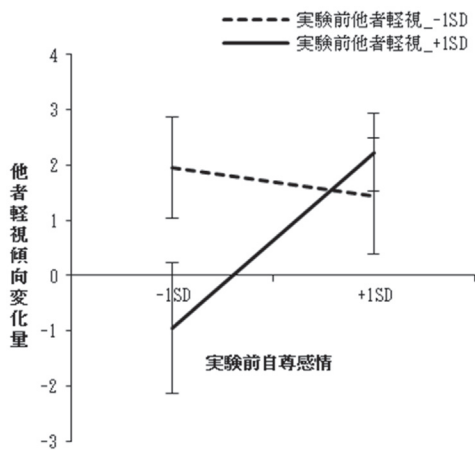


Fig 1. 実験前他者軽視傾向と実験前自尊感情の交互作用効果

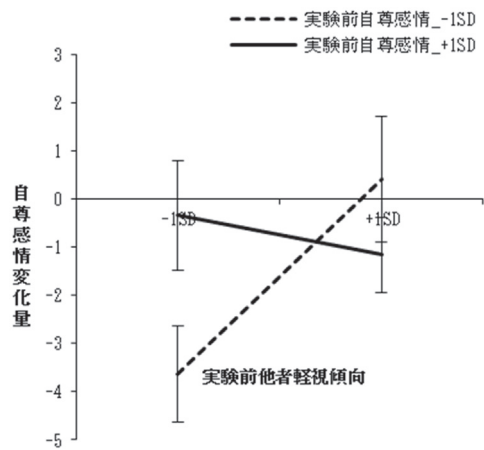


Fig 2. 実験前他者軽視傾向と実験前自尊感情の交互作用効果

得点変化量に有意な効果はなく、自尊感情得点の高低に関わらず高い変化量を示していた ($\beta = -.085, n.s.$)。それに対して、実験前他者軽視傾向得点が高い場合 (+ 1SD)、実験前自尊感情得点は他者軽視傾向得点変化量を高める効果を持っていることが示された ($\beta = .526, p < .05$)。

実験前の他者軽視傾向および自尊感情が自尊感情得点変化量に与える影響

前項と同様に独立変数を設定し、従属変数を自尊感情得点変化量とした場合 (Table 2)、主効果のみのモデルと比較して、交互作用項を含めたモデルは、交互作用項の投入による調整済み決定係数の増加が有意であった。また、交互作用項は自尊感情得点変化量を有意に予測していた。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った (Figure 2)。その結果、実験前自尊感情得点が高い場合 (+ 1SD)、実験前他者軽視傾向得点は自尊感情得点変化量に有意な効果はなく、自尊感情得点の高低に関わらず変化量に有意な差はなかった ($\beta = -.124, n.s.$)。それに対して、実験前自尊感情得点が低い場合 (- 1SD)、実験前他者軽視傾向得点は自尊感情得点変化量を高める効果を持っていることが示された ($\beta = .614, p < .05$)。

実験中に生じた気分と実験前他者軽視傾向得点が高者軽視傾向得点変化量に与える影響

現在不安因子と実験前他者軽視傾向得点が高者軽視傾向得点変化量に与える影響 現在不安因子、実験前他者軽視傾向得点、現在不安因子と実験前他者軽視傾向得点の交互作用項の3変数を独立変数、他者軽視傾向得点変化量を従属変数として強制投入法による階層的重回帰分析を行った (Table 3)。その結果、主効果のみのモデルと比較して、交互作用項を含めたモデルは、交互作用項の投入による調整済み決定係数の増加が有意であった。また、交互作用項は他者軽視傾向得点変化量を有意に予測していた。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った (Figure 3)。その結果、実験前他者軽視傾向得点が低い場合 (- 1SD)、現在不安因子は他者軽視傾向得点変化量に有意な効果はなく、現在不安因子の高低に関わらず高い変化量を示していた ($\beta = .256, n.s.$)。それに対して、実験前他者軽視傾向得点が高い場合 (+ 1SD)、現在不安因子は他者軽視傾向得点変化量を低減させる効果を持つことが示された ($\beta = -.631, p < .01$)。

実験反発因子と実験前他者軽視傾向得点が高者軽視傾向得点変化量に与える影響

実験反発因子、実験前他者

Table 3. 他者軽視傾向と実験中に生じた気分の交互作用に関する階層的重回帰分析の結果

Step	独立変数	R^2	ΔR^2	β
1	主効果	.030		実験前他者軽視傾向 (a)
				.075
2	交互作用	.188	.157*	現在不安因子 (b)
				-.153
(a) × (b)				
1	主効果	.055		実験前他者軽視傾向 (a)
				.103
2	交互作用	.196	.141*	実験反発因子 (b)
				-.221
(a) × (b)				
1	主効果	.037		実験前他者軽視傾向 (a)
				.083
2	交互作用	.204	.167*	現在自己肯定 (b)
				.175
(a) × (b)				
1	主効果	.011		実験前他者軽視傾向 (a)
				.085
2	交互作用	.044	.033	実験肯定・自己肯定的展望因子 (b)
				-.066
(a) × (b)				

注) * $p < .05$, ** $p < .01$

従属変数はすべて他者軽視傾向得点変化量

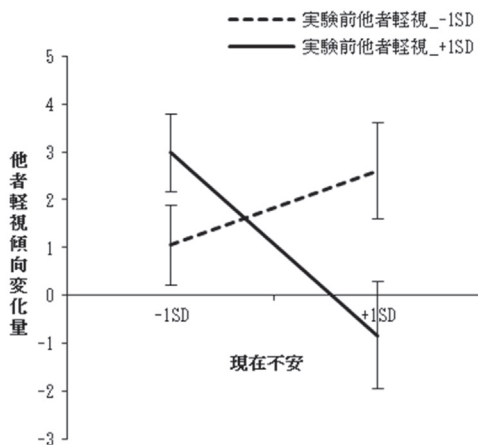


Fig 3. 実験前他者軽視傾向と現在不安の交互作用効果

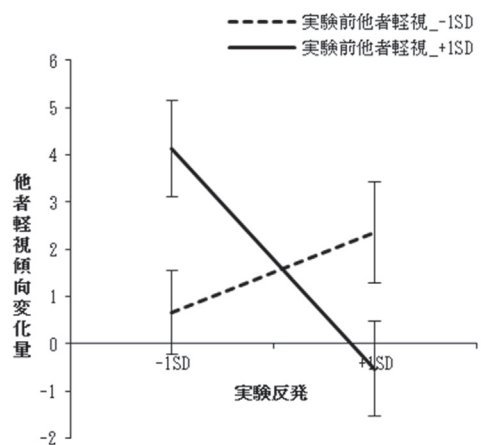


Fig 4. 実験前他者軽視傾向と実験反発の交互作用効果

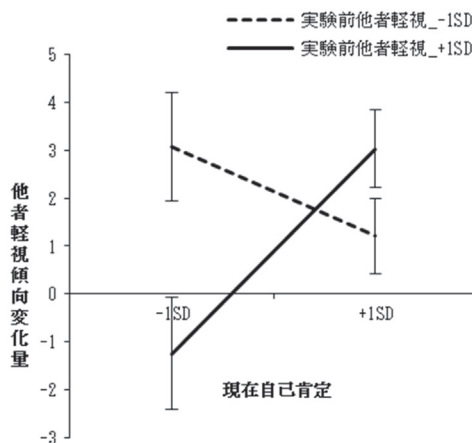


Fig 5. 実験前他者軽視傾向と現在自己肯定の交互作用効果

軽視傾向得点、実験反発因子と実験前他者軽視傾向得点の交互作用項の3変数を独立変数、他者軽視傾向得点変化量を従属変数として強制投入法による階層的重回帰分析を行った (Table 3)。その結果、主効果のみのモデルと比較して、交互作用項を含めたモデルは、交互作用項の投入による調整済み決定係数の増加が有意であった。また、交互作用項は他者軽視傾向得点変化量を有意に予測していた。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った (Figure 4)。その結果、実験前他者軽視傾向得点が低い場合 ($-1SD$)、実験反発因子は他者軽視傾向得点変化量に有意な効果はなく、実験反発因子の高低に関わらず高い変化量を示していた ($\beta = .278, n.s.$)。それに対して、実験前他者軽視傾向得点が高い場合 ($+1SD$)、実験反発因子は他者軽視傾向得点変化量を低減させる効果を持っていることが示された ($\beta = -.771, p < .01$)。

現在自己肯定因子と実験前他者軽視傾向得点が他者軽視傾向得点変化量に与える影響 現在自己肯定因子、実験前他者軽視傾向得点、現在自己肯定因子と実験前他者軽視傾向得点の交互作用項の3変数を独立変数とし、他者軽視傾向得点変化量を従属変数として強制投入法による階層的重回帰分析を行った (Table 3)。その結果、モデル比較による調整済み決定係数の増加は有意であった。また、交互作用項は他者軽視傾向得点変化量を有意に予測していた。交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った (Figure 5)。その結果、実験前他者軽視傾向得点が低い場合 ($-1SD$)、現在自己肯定因子は他者軽視傾向得点変化量に有意な効果はなく、実験反発因子の高低に関わらず高い変化量を示していた ($\beta = -.308, n.s.$)。それに対して、実験前他者軽視傾向得点が高い場合 ($+1SD$)、現在自己肯定因子は他者軽視傾向得点変化量を低減させる効果を持つ傾向があることが示された ($\beta = .706, p < .01$)。

実験肯定・自己肯定的展望因子と実験前他者軽視傾向得点が他者軽視傾向得点変化量に与える影響 実験肯定・自己肯定的展望因子、実験前他者軽視傾向得点、実験肯定・自己肯定的展望因子と実験前他者軽視傾向得点の交互作用項の3変数を独立変数とし、他者軽視傾向得点変化量を従属変数として強制投入法による階層的重回帰分析を行った (Table 3)。その結果、モデル比較による調整済み決定係数の増加は有意ではなかった ($\Delta R^2 = .033, n.s.$)。

考 察

本研究の目的は、仮想的有能感の中核をなす他者軽視傾向の高い個人が、強みという個人の肯定的側面を認識しその内容を周囲の他者に開示しあうという相互理解状況を経験することで、他者軽視傾向の低減に寄与するかどうかを探索的に検討することであった。以下、本研究で

得られた結果から仮説を検証する。

実験前他者軽視傾向得点が高く実験前自尊感情得点が高い参加者は、実験前他者軽視傾向得点が高く実験前自尊感情得点が高い参加者より他者軽視傾向の低減がされやすいことが示された。したがって、仮説1「他者軽視傾向と自尊感情が高い参加者が、他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者に比べ、本実験操作である強みへの焦点付けおよびその相互開示状況という親密な対人関係を媒介に他者軽視傾向が低減される」は支持された。これは、他者軽視傾向が高い場合、自尊感情の高さが他者軽視傾向の低減を促進することを示す結果であり、強みの焦点づけによる自尊感情の喚起と強みの相互開示が他者軽視傾向の低減に影響したと示唆される。

仮説1が支持されたため、仮説2の検証を行う。実験前他者軽視傾向得点が高く実験前自尊感情得点が高い参加者は、実験前他者軽視傾向得点が低く実験前自尊感情得点が高い参加者より自尊感情の向上がされにくいことが示された。したがって、仮説2「他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者は、他者軽視傾向が自尊感情として補償的に働くため、他者軽視傾向が低く自尊感情が低い参加者と比べて自尊感情が向上されにくい」は支持された。これは、自尊感情が低い場合、他者軽視傾向の高さが自尊感情の向上を阻害することを示し、速水・小平 (2006) で指摘された「仮想型」の仮想的有能感が自尊感情の補償であることを裏付ける結果であるといえる。

実験終了直後に実験中または実験後に生じた気分を測定し、実験にポジティブな反応を示す「実験肯定・自己肯定的展望」、「現在自己肯定」因子、および実験にネガティブな反応を示す「現在不安」、「実験反発」因子を抽出した。これら4因子それぞれと実験前他者軽視傾向得点、およびその交互作用項を要因として階層的重回帰分析と単純傾斜検定を行った。その結果、実験前他者軽視傾向得点が高く実験にネガティブな反応を示した参加者は、実験前他者軽視傾向得点が高く実験にネガティブな反応を示さなかった参加者に比べ、他者軽視傾向が低減されにくいことが示された。したがって、仮説3「他者軽視傾向が高く自尊感情が低い参加者は、過去や現在の出来事をネガティブに認知しやすいという特徴から、過去の経験に基づく自己の長所を内省することや自己開示という対人経験がネガティブに認知されやすく、このネガティブな認知を要因として他者軽視傾向の低減が阻害される」は支持された。

仮説1を検証した結果より、仮想的有能感の低減に関しては他者軽視傾向と自尊感情のどちらも高い「全能型」は肯定的認知への介入によって低減効果が認められることが示された。これまでの仮想的有能感に関する研究では自尊感情との高低による類型を用いて社会的不適応との関連が検討されてきたが、仮想的有能感の低減に関し

でも同様に低減効果が類型別に異なることが明らかになった。一方、石川・茅野（2018）の研究では否定的認知に介入し基本的自尊感情の向上によって仮想的有能感の低減を検討したが、有意な低減は認められなかった。この結果と本研究の異同を検討すると、個人の肯定的認知に介入することで仮想的有能感は低減すると考えられる。また、石川・茅野（2018）の知見と本研究において仮想型の仮想的有能感の低減および自尊感情の向上がみられなかった結果をあわせて考えると、「仮想型」は否定的認知や肯定的認知といった認知の変容に対して抵抗感が強いことが推察される。本研究の仮説3で検証された結果では、他者軽視傾向が高く実験中にネガティブな気分が生じた参加者は他者軽視傾向の低減がみられなかった。「仮想型」はすでに有している否定的な認知傾向を変化させることに抵抗があり、この抵抗感が本研究ではネガティブな気分として測定されたと考えられる。また、他者軽視傾向が高く実験中に現在の自己に対してポジティブな気分が生じなかった参加者は他者軽視傾向の低減がみられなかった。仮想的有能感の高い個人は日常生活においてネガティブ感情を抱きやすい（小平・小塩・速水, 2007）が、「仮想型」は日常的に生起するネガティブ感情や日々のその時点における自分自身をうまく肯定できないことによって、他者軽視傾向の低減が妨げられていることが示唆される。よって、本研究の結果から「全能型」は肯定的な認知に焦点づけし他者との親密な対人関係を構築することで他者軽視傾向は低減されるが、「仮想型」は肯定的な認知に焦点づけすることに對する抵抗感を和らげることで他者軽視傾向が低減されるとまとめられる。

本研究の限界と今後の課題として以下の3点が指摘できる。第1は、本研究において、個人の肯定的側面である長所を筆記するという要因と、その内容を他者に開示するという要因の2つが混在しており、そのどちらが他者軽視傾向の高い者の他者軽視傾向の低減に影響を与えるかは検討されていない点である。今後、2つの要因を弁別した形での実験を行い、何が他者軽視傾向の軽減に影響を及ぼすのかを詳細に検討する必要がある。

第2は、長所の筆記内容について、自己の長所に関する記述においてどのような内容を記述することが他者軽視傾向の低減と関連するか検討されていない点である。強みへの焦点づけによって自尊感情が高まり他者軽視が低減されるのであれば、今後は、低減量の高い参加者と低い参加者に特有な記述内容の質的な検討が必要と期待される。

第3に、本研究では、強みの開示状況における周囲の他者の属性は統制されていなかった。強みの開示状況で発生する自己開示や他者からのフィードバックの受容という観点から、他者軽視傾向の高い者の対人場面における相互作用の意図はこれまで検討されておらず、今後の

検討が求められる。

以上のような限界と課題があるものの、本研究が強みという個人の肯定的側面を認識しその内容を周囲の他者に開示しあうという相互理解状況の経験に着目し、他者軽視傾向が高い者の他者軽視傾向低減方略に2つの異なるプロセスがある可能性を探索的に見出したことは、一定の理論的意義があるとまとめられる。

引用文献

- 速水 敏彦（2011）. 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 速水 敏彦（2012）. 仮想的有能感の心理学—他人を見下す若者を検証する— 北大路書房.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子（2004）. 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, 51, 1-7.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子・蘭 千壽・佐藤 有耕・小泉 令三・櫻井 茂男（2003）. 「仮想的有能感」をめぐる 日本教育心理学会第45回大会総会発表論文集, S46-S47.
- Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127-135.
- 速水 敏彦・小平 英志（2006）. 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14, 171-180.
- 速水 敏彦・杉本 英晴（2012）. 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望 発達心理学研究, 23, 224-232.
- 日湯 淳子・齊藤 誠一（2007）. 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 109-119.
- 堀川 綾子・柴山 謙二（2015）. 児童の不安低減と自尊感情向上に対する学級規模の心理教育プログラムの効果について(2)：認知的側面と身体的側面への働きかけの導入 熊本大学教育学部紀要, 64, 113-121.
- 石川 祐樹・茅野 理恵（2018）. 仮想的有能感と基本的自尊感情・社会的自尊感情との関連—心理教育的プログラムの探索的検討— 信州心理臨床紀要, 17, 1-8.
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦（2007）. 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験—抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して— パーソナリティ研究, 15, 217-227.
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦（2009）. 高校生における仮想的有能感といじめの関連教育心理学研究, 57, 432-441.

- Mitchell, J., Stanimirovic, R., Klein, B., & Vella-Brodrick, D. (2009). A randomised controlled trial of a self-guided internet intervention promoting well-being. *Computers in Human Behavior*, *25*, 749-760.
- 大竹 恵子・島井 哲志・池見 陽・宇津木 成介・ピーターソン クリストファー・セリグマン マーティン EP (2005). 日本版生き方の原則調査票 (VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths) 作成の試み 心理学研究, *76*, 461-467.
- Park, N., & Peterson, C. (2008). Positive psychology and character strengths: Application to strengths-based school counseling. *Professional School Counseling*, *12*, 85-92.
- Peterson, C., & Seligman, M. E. (2004). *Character strengths and virtues: A handbook and classification*. UK.: Oxford University Press.
- Quinlan, D. M., Swain, N., Cameron, C., & Vella-Brodrick, D. A. (2015). How 'other people matter' in a classroom-based strengths intervention: Exploring interpersonal strategies and classroom outcomes. *Journal of Positive Psychology*, *10*, 77-89.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Seligman, M. E. (2012). *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*. Simon and Schuster. (宇野 カオリ (監訳) (2014). ポジティブ心理学の挑戦—“幸福”から“持続的幸福”へ— ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- Seligman, M. E., Steen, T. A., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress: Empirical validation of interventions. *American Psychologist*, *60*, 410-421.
- 鈴木 有美 (2010). 仮想的有能感低減の要因を探る—協同的な学びの効果— 東海心理学会第59回大会発表論文集, *37*.
- 高木 邦子 (2010). 専門職養成課程の職業的社会的化における現場実習経験の効果2—自尊感情および他者軽視傾向との関連について— 聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要, *8*, 83-95.
- 植村 善太郎 (2010). キャリア教育科目受講前後での勤労観および仮想的有能感の変化 教育実践研究 (福岡教育大学教育学部附属教育実践総合センター), *18*, 213-216.
- Wood, A. M., Linley, P. A., Maltby, J., Kashdan, T. B., & Hurling, R. (2011). Using personal and psychological strengths leads to increases in well-being over time: A longitudinal study and the development of the strengths use questionnaire. *Personality and Individual Differences*, *50*, 15-19.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, *30*, 64-68.
- 山本 将士・速水 敏彦・松本 麻友子 (2008). 仮想的有能感と対人関係(2)—仮想的有能感と低下と教師の関わり方— 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 247.

注

- 1) 本論文は、第1著者が第2著者の指導のもと、2018年度に立正大学心理学部に提出した卒業論文を再分析・再構成したものである。
- 2) 近藤 (2010) は、自尊感情には社会的自尊感情と基本的自尊感情の両側面があると考えている。基本的自尊感情はありのままに自分自身を受け入れる感情であり、他者との比較でなく、絶対的、無条件、根源的で永続性のある感情であると定義されている。

要約

本研究では、参加者が自分自身の肯定的側面に含まれる強みを内省し、お互いに強みを認識しあうような相互理解状況を経験することが仮想的有能感の中核をなす他者軽視傾向の低減に与える影響を分析した。大学生・大学院生46名が3・4名から構成される集団実験に参加した。この実験では、参加者は過去の成功体験に基づく自己の長所およびその長所を活かした将来の展望を記述するよう教示され、他者と開示しあうことを求められた。その結果、実験前の自尊感情と他者軽視傾向がともに高い参加者は、実験前の自尊感情が低く他者軽視傾向が高い参加者よりも、他者軽視傾向の低減効果が有意に高かった。実験前の他者軽視傾向が高く、実験中に生じたネガティブな気分が生じた参加者は、本研究の操作による他者軽視傾向の有意な低減効果がみられなかった。

キーワード：仮想的有能感、他者軽視傾向、自尊感情、強み